



2019/7/16 第四号

お仕事帰りの学校説明会

7月5日 お仕事帰りの説明会が開催された。私も登壇した。こういう会に登壇するのは生まれて初めて。この歳で生まれて初めての経験をすると、人生とは面白いものである。その様子を教職員向けの校内通信に書いてみた。その一部をここに紹介してみよう。

《お仕事帰りの学校説明会》

◎ 大成功

参加人数が昨年の倍。倍増である。こういうことはめったにない。これを大成功と言わずに何と言う。「大勢が関心を示して参加」を素直に喜びたい。

「なぜ倍増か」である。説明会含め、これまでの実践、広報等々、すべての総合的成果である。ここでは、今回の説明会に絞り、内容・運営の二面から考えてみる。

◎ 説明会の「未来と今」

まずは、内容面。これは《六浦小モデル 19-23 プラン》と言える。それが何なのかである。六浦小は「未来と今」を語ったように思う。

《六浦小モデル 19-23 プラン》という《未来》語る。

そして、その未来に向けて「今、こんなことに子どもたちがこんなふうに取り組んでいる」という実践報告、すなわち、《今》を語る。

今、本校は「語る」と表記した。それは何か。モデルや実践に込められている教師の「思い・願い」、それが表現されている、それが「語る」。モデルという《未来》、その夢に向かって《今》を語るから思い・願いがこめられ、語られ、伝わっていく。

美化しすぎかな。でも、夢を語る小学校の先生、学校でありたい。

◎ 「説明会」自体がプレゼン

次、運営面。説明会そのものがプレゼンとなっている。

私のプレゼンが終わったら拍手が起きた。想定していなかった。とてもうれしかった。

そして、かっこよく言うとアイスブレイキング、ぶっちゃけると「受けねらい」に反応して笑ってくれた。ある先生がこう言った。「説明会で拍手や笑いが起きる学校はない」

参加者に聞き入る姿勢があったと思う。

私のプレゼンは「概念・抽象」であった。そこに「実践報告」という《生の子どもの様子》紹介が息吹を吹き込んだ。「六浦小モデル・『今の子どもの様子』・管理職でない先生の登壇…」 子どもたちの表情、作品、ノート、写真…こういう《本物》の効果は大きい。

リハーサルの時、私はこう言った。「『説明会とはこういうものだ』という固定的イメージを脱ぎ捨て、参加者も登壇者も楽しい、本校ならではの説明会にしていこう」その通りだったのか、気になる。参加者がどう感じたか、気になるところではある。